

はじめに：ACTFL(American Council on the Teaching of Foreign Languages)は1986年に言語能力を測定するための新たな基準を作成し公表した。話し言葉の能力テストがまだ議論の段階である今、ACTFLの基準によるOPI(Oral Proficiency Interview)について知ることは意味のあることだと思う。

## I OPIとはなにか

OPI(Oral Proficiency Interview)は「話し言葉の能力を総合的に評価するための一定のやり方」と定義される。それでは評価対象である Oral Proficiency(話し言葉の能力)とは何かといえば、それは現実のコミュニケーション場面でのCommunicative Competence(運用能力)を意味し、そこでは文法規則だけでなく、社会言語学上、内容上の能力を含む言語使用の規則を使いこなせなければならない。

つまり、OPIは実生活の中で言語を適切に使う能力を測ろうとするものであり、ある特定のコースで学習者が決められた学習項目をどの程度学習したかをみるアチーブメントテストとは本質的に異なるものである。とはいえ、初級や中級の下のレベルでは、学習したことが非常に限られているためにアチーブメントテストに似てくこともあるが、被験者がOPIのために準備する必要はないし、準備することもできない。

## II OPIの構成

### 1. インタビューの方法

テストは被験者に対してある一定の形式に従って10～30分のインタビューを行い、被験者から色々なスピーチサンプルを集める。この時次のことがらが満たされなければならない。

a) 限り無く自然な会話：被験者のありのままの能力を反映させるために、被験者が普通の心理状態にあるように配慮する。インタビュー中はメモはとらず、テープに録音する。また教師気質を出して、助けたり褒めたりしない。

b) スピーチのサンプルの量と質：色々な種類の話題についてサンプルを取る。テストが喋り過ぎると十分なサンプルが得られない。また、そのサンプルは被験者の能力の上限と下限が判断できるものでなければならない。話題が限られていたり、インタビューが短すぎたりしても、判定できないサンプルになる。

## 2. OPIの4段階

I	ウォームアップ	緊張をとり、自然な発話ができる状態にする 簡単な質問によって、おおまかなレベルを探る
II	レベルチェック	徐々に質問のレベルを上げながら話題を広げ まず下限をきめる
III	突き上げ	IIで探ったレベルが維持できるかどうか見る またそれより高いレベルの材料でどこで言語的 挫折をおこすかを調べ、レベルをきめる
IV	締め括り	維持できるレベルにもどし、満足させた状態で インタビューを終わる

前にも述べたように、OPIの目的は測定可能なスピーチサンプルをとることにある。サンプルを聞き出す過程は上記4つの段階に分かれる。まず、Iでは、簡単な質問によって、おおまかなレベルを知る。例えば、名前や出身国などを聞いてみる。それに対する答えの仕方によって、次の質問のレベルや話題を考える。

こうしてIIとIIIを数回繰り返して、レベルの下限と上限に当たるスピーチサンプルを集め、次にロールプレイなどによって、もっとも安定したレベルの確認を図る。

最後に再び維持できるレベルの会話にもどして、被験者にやすらぎと満足感を与える状態でインタビューを終わる。全体の構成は時間配分を考えIVに十分時間をのこしておくことが大切である。

### 3. 言語的挫折とはどういう状態か。

レベルチェックの際、言語的挫折を起こさせて言語能力の上限を見る。自分の能力より高い言語材料を突きつけられると、被験者は言葉につまって、言葉を探したり、テストに質問したりする。また急に母語や媒介語ではなそうとする。それまで滑らかに話していたのに、混乱した状態になる。その外急に文法的なミスが目立つようになるといった特徴が見られる。このサインを見落とさないように注意する必要がある。言語的挫折のないイ

ンタビューは、上限を判定することができないので、判定不能とかんがえられる。ただし後述する超級に属する被験者の場合には挫折がみられない。

### Ⅲ 評価

OP I の評価はOP I 中、インタビュー終了後の二段階でおこなう。後者では録音テープを聞いて最終的評価を行うが、いずれの場合も評価はACTFL の評価基準に照らして行われる。ACTFL の基準は初級、中級、上級とその上の超級に大きく分けられ、さらに下・中・上のサブレベルに区分される。ACTFL のOP I における評価とは、点数化されるのではなく、ある幅をもったレベルの評価である点か特徴といえる。

ACTFL のOP I の評価基準は大きく 4 つの柱からなる。

- 1 機能・タスクー言語をコミュニケーションの道具と考え、それを使って実生活の場で何を達成することができるか
- 2 脈絡・内容 ーどんな場面でどういう内容、話題について話せるか
- 3 談話の型 ーどういう談話の型で話しているか
- 4 正確さ ー文法、語彙、発音、社会言語学的要素、会話運用能力、流暢さはどうか

各レベルの大まかな定義は以下のようなものである。

初級 (ノビス)	下 中 上	暗記した語・句に限られ、日常的レベルの最小限の伝達ができる。
中級	下 中 上	身近なこと、日常的な脈絡で簡単な応答ができる。 普通の状況进行处理できる。文をつくることができる。
上級	上	説明・叙述ができる。複雑な状況进行处理できる。 接続詞をつかって段落のある話ができる。 言い換えもでき、積極的に話せる
超級		意見・仮説をのべ、複雑な交渉ができる。 あらゆる脈絡で専門的な話題もこなせる。 間違いはまれ。フォーマル・インフォーマルな場で適切に話せる。

上記の評価基準<sup>1</sup>は「言語能力は丁度逆ピラミッドの形と考えると分かり易い。つまり初級から中級レベルにあがることはかなり易しい。しかしそこから、上級へ移行するためにははるかに多くのことが出来ていなければならないし、超級へのジャンプはさらに困難である。(図参照)

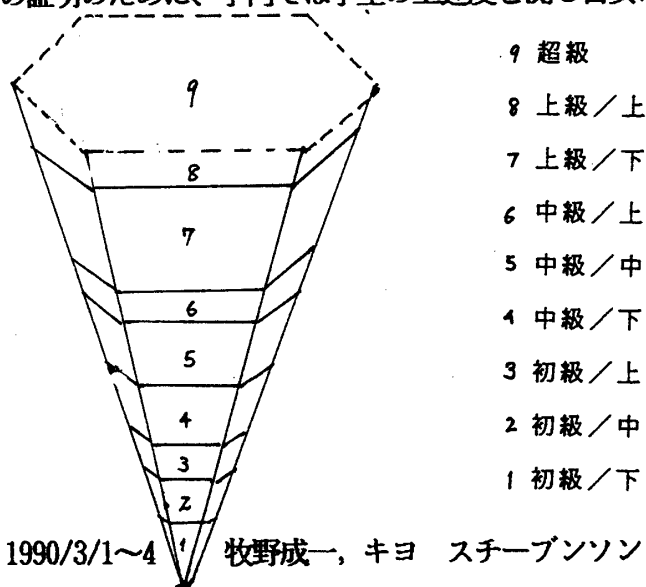
#### IV OPIの信頼性

これまで見てきたように、OPIはACTFLの評価基準に拠って評価するものであり相対評価ではない。同じ種類の質問をして、その正誤、出来・不出来を問題にするものではない。インタビューの内容は被験者の答えによって決まってくる。そこには個人の背景、人生経験、興味などコントロールできない因子が影響を与える。

それでは、比較出来ないかといえば、そうではない。インタビューの構成と評価の基準が同じなので、異なるテストのいろいろな場面でのテストを比較することができる。

テストとしての信頼性を保つため、ACTFLの所定の訓練を受け、資格を認定されたテストターがテストすることが必要である。

OPIは被験者がいつ、どこで、どういう目的で、どんな教科書を使って、どの機関で、どんな教師と日本語を学んだかということには無関係である。それゆえ、学校、機関では、学生の言語能力の証明のために、学内では学生の上達度を測る目安につかうことができる。



#### 参考文献

ACTFL OPI Workshop 1990/3/1~4 牧野成一, キヨ スチーブンソン ALC 主催

THE ACTFL ORAL INTERVIEW Tester Training Manual 1989 ACTFL

「ATFL言語能力基準とアメリカに 牧野成一, 1990 『日本語教育61』

おける日本語教育」

Teaching Languages in Context Omaggio, A. 1986, HEINE & HEINE

ACTFL OPI Workshop 1989/12/24~25 鎌田 修 牧野成一